



このたび日本顎関節学会では News Letter を発行することになりました。

News Letter 発行の目的は、日本顎関節学会の活動に関する Update な情報を会員の皆様に伝えることにより、学会の現状を理解していただき、また最新情報を臨床に活かしていただくことにあります。News Letter はメールで会員宛にお送りし、ホームページに掲載します。

今回は、10月16日に行われました第40回日本顎関節学会学術講演会について、学術委員会委員長である日本大学松戸歯学部の小見山 道先生に、報告していただきます。

## 第40回一般社団法人日本顎関節学会学術講演会報告

第40回一般社団法人日本顎関節学会学術講演会は、平成28年10月16日(日)に日本大学歯学部2号館1階・研修医講堂において57名の参加者で開催された。一般社団法人日本顎関節学会では、顎関節疾患の診察、検査、診断、治療にあたる専門的知識と経験を有する歯科医師を養成することを目的とし、本講演会を開催している。2014年に顎関節症の分類・診断・治療に関する新たな国際標準が発表されたのを受けて本学会も病態分類等を改訂した。それに伴い本講演会も内容を一新して実習付きの実践的なプログラムを準備し、過去2回の開催では好評を博して、今回がその3回目である。

開会にあたっての理事長挨拶に引き続き、九州大学歯学部の築山能大先生を午前の座長として、学術講演会が始まった。最初の演者は理事長の古谷野潔先生(九州大学)である。講演タイトルは「顎関節症の病態分類と診断基準」ということで、2013年に日本顎関節学会から発表された「顎関節症の病態分類(2013年)」について「顎関節症の診断基準」と共に顎関節症の根幹となる部分を話された。また午後からの講演の事前解説として、国際的な顎関節症の統一基準である Diagnostic Criteria for Temporomandibular Disorders (DC/TMD)の成り立ちから使い方までの概要について説明された。



古谷野 潔理事長による講演の様子



画像診断を講演中の小林 馨前理事長

引き続き、前理事長の小林馨先生(鶴見大学)が「顎関節症の画像診断」ということでMR像トレース実習を含めた内容で講演された。まずは顎関節の基本的な解剖と顎関節円板障害の実際について剖検所見をもとに講義された後に、画像解剖、エックス線像とMR像の解釈について詳細に説明された。これら一連の講義を聴いた後に、配布されたMR像の資料と準備された鉛筆を用いて、下顎頭や関節窩、顎関節円板の外形をトレースし、その位置関係を確認し、診断する実習を行った。受講者は、講義を聴いて理解しているつもりであるが、実際にMR像とトレースすると、なかなか顎関節円板の外形を捉えることが難しく、講義だけでは得られない貴重な経験となった。

昼食の休憩をはさんで午後の講演となった。午後の最初は小見山による「顎関節症の診察・検査」で咀嚼筋の触診実習を含めて行った。まずはDC/TMDでは質問票と検査用紙を使用して、疼痛関連顎関節症と顎関節円板障害、変形性顎関節症の診断樹に沿って診断する内容を説明し、検査の実際の手順について、検査用紙の順番に

沿って説明していった。開口量の計測等の説明後、触診の検査において受講者相互での実習となった。数名のインストラクターが巡回する中で受講者は、咬筋、側頭筋、顎関節の触診を DC/TMD の方法に沿って真剣に実習を行っていた。DC/TMD は検査に使用する用語をコマンドとして細かく規定しており、また検査方法について



小見山による講義風景

も同様に細かく規定することで、検査者間の相違を可及的になくし、最も頻繁に認められる顎関節症を確実に診断できるように設定されている。全体を把握して実際の臨床に応用するには、少し慣れるのに時間がかかると思われるが、世界標準の方法で顎関節症を診断できる第1歩であり、受講者は真剣に実習を行っていた。



咀嚼筋触診を相互実習中の受講者

次いで、築山能大先生による「顎関節症の症例提示と解説」として症例をベースにして DC/TMD に沿った診断まで行うハンズオン実習が行われた。このパートでは、ここまでの講演内容を踏まえて、医療面接、診察、検査に基づく顎関節症の病態診断、適切な治療方法の選択までの流れについて、実際の症例での対応を講演された。受講者には3症例分の基本情報と DC/TMD の質問票や検査用紙に記載された診断のための情報が渡され、1症例ずつ、DC/TMD の診断樹に沿って、診断を決定していく作業を行った。普段の自己流の診査、診断と違い、質問票と検査用紙の情報を診断樹に当てはめて行く DC/TMD 方式であり、左右の別や複数の病態診断を行うので、その組合せが少し複雑になる症例もあり、受講者は頭をひねりながら、一生懸命 DC/TMD に沿った診断の流れを体得していた。



症例をベースに講演される築山能大先生

最後に慶応大学の和嶋浩一先生による「顎関節症の各病態に対する治療」の講演が行われた。顎関節症の治療のためには、病状の把握から病態の診断、すなわち「顎関節の病態分類（2013年）」により診断された顎関節症



顎関節症の治療を講演される和嶋浩一先生

は、疼痛関連顎関節症と顎関節円板障害、変形性顎関節症の診断と、病態を発生させた原因に対する診断が必要であり、その上で各病態に対する原因を踏まえた治療となる。現在の顎関節症治療の主体は疾患教育と患者自身によるセルフケアである。もちろん心理・社会的要因の把握とその対応も必要となる。したがって、この治療のアドヒアランス向上には、患者への病態成立の原因と過程を説明し、納得を得た後に、治療法の呈示を行うことが必要であり、その具体的な方略について詳細に説明された。また複数の病態が存在する場合の治療手順について、顎関節痛の改善から始め、ついで咀嚼筋痛の治療と進む手順について、それぞれのステージでの運動療法、セルフケア、スプリント療法、各種処方等について具体的に説明され、受講者は各病態とその治療の進行の理解のために真剣に耳を傾けていた。

これだけ顎関節症の第一線で活躍されている先生方が一同に会し、また現在の顎関節症の最新トピックである DC/TMD に沿った統一された内容の学術講演会が開催できるのは、顎関節学会ならではの企画といえる。今後このような企画で学術講演会を開催する予定であり、標準的な診査、診断から治療に至る流れを共有するために、新認定医や専門医、指導医の各種申請予定の会員、非会員を含めて多くの皆様の参加を期待する。